



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3674 号 2017.5.26 発行

ある再会 “せっかく生まれてきたのだから”



NHK ニュース 2017年5月25日

その女性は生まれた時、息をしないで、その影響で体を動かすことも話すことも自由にできなくなりました。それでも10年前、周囲の反対を押し切ってひとり暮らしを始め、私はその第一歩を取材しました。去年、神奈川県で障害者19人が殺害される事件が起きたあと、私はどうしてもその女性に会いたくなりました。ある言葉が心に引っ掛かってしかたがなかったからです。(報道局 牧本真由美記者)

10年前 私が出会った女性

その女性は中原和代さん。山口県で暮らしています。中原さんは、重度の脳性まひです。手足がかたまり、筋肉も常に緊張しています。へたり込むように座ることしかできません。理解力はあるものの、すぐにことばは出せません。体を震わせ絞り出すように、声を出します。なので、幼い頃からずっと

と施設の中での人生でした。多くの介助者がいて、安心だからです。生まれてから30年以上、中原さんの暮らす世界は施設の中がほとんどすべてでした。

せっかく生まれてきたのだから

10年前、私と初めて出会った日、中原さんが言いました。当時、中原さんは34歳。「せっかく・生まれて・きたの・だから、外の・世界を・見てみたい」

“外の世界”とは、私たちが普通に暮らす社会のことです。中原さんは10年近くひとり暮らしをしたいと訴え続けていたのです。母親も医療者も心配して大反対してきました。それでも、「1度きりの自分の人生、生き方は自分で決めたい」と諦めませんでした。

一変した生活

NPOが中原さんに協力してくれることになり、私は施設を出る第一



歩を取材をしました。NPOの代表も障害があり、車いすで生活しています。「どんな重度の障害者だって自分の希望どおりに生活する、これはもう人として当たり前の権利です」。代表はそんなことを語りました。

中原さんは生活保護を受けNPOが用意した小さなアパートに住むことになりました。黙っていても誰かがサポートしてくれた生活は一変しました。例えば食事。食べたいものを自分で考えてヘルパーと一緒に買い物に行きます。さらにヘルパーに「にんじん4分の1を角切り、塩5振り」などと細かく伝えて自分の意志で味をつけるのです。取材した日、想像以上に辛いカレーができてしまいました。「からいい〜！」と、一口食べて叫んだ中原さんの顔はうれしそうでした。“普通”に暮らしている人には当たり前のことが、大きな壁だったり喜びだったりしていました。



あの殺傷事件

今から10か月前、去年7月26日、神奈川県相模原市で障害者19人が殺害される事件が起きました。逮捕されたのは施設で働いていた元職員。

「障害者は不幸を作ることしかできない」と話していたと聞きました。

私は中原さんに会いに行きたくなりました。“不幸を作ることしかできない”という言葉が心に引っ掛かってしかたがなかったのです。

10年ぶりの再会

連絡を取り会いに行きました。住んでいたのは以前とは別のアパートでした。1日11時間ヘルパーの支援を受け、いままも1人で暮らしていました。

変わったのは部屋に3匹の猫がいたことでした。路上で弱って動けなくなっていたところを助けたのです。そしてその猫が原因で住まいを追い出されたこともあったようです。それでも助けた猫のために、苦勞して別の住まいを見つけました。中原さんはそう

いう人です。

“かなえた夢”

手が硬直しているので猫をなでることはできません。えさは足の指であげていました。

「小さい・ころ・からの夢・は、動物園・の・飼育・係。夢が・かなった」

背筋を伸ばし、笑顔で言いました。自分の意思で生き方を選び、自分なりの夢をかなえていました。小さなことと思うかもしれませんが、料理の手順も、10年前と比べてうまく伝えられるようになっていました。10年前はひとり暮らしに大反対だった母親は、いま、応援してくれるようになったそうです。

悩んでばかり でもそれが

横に座っていまの気持ちを聞いたら、「自由・だけど・難しい。ひとり・は・さみしい。これで・良かった・か、悩んで・ばかり」と、時間をかけて答えました。

私は自分が、中原さんが頑張る姿ばかりをとらえようとしていたのだと思いました。月並みなことばだけけれども、障害があることで現実は厳しいのだと思いました。ただ、少し間を置いて次の言葉が続きました。

「でも・それが・しあわせ・で・・・たのしい」

人生は不公平だけど

私は、人生は不公平だと思っています。努力ではどうしようもならないことが突きつけられるからです。「どうして自分だったんだろう」という思いの連続です。生まれながら、重い障害がある中原さんも、“なんで、なんで、どうして”と思うことがあるはずですが、ただ中原さんは別れ際に、「これ・が・わたし・の・じんせい。たいへん・だけど・これが・・・じんせい」と笑顔で言いました。

不公平な人生に見えても、それが不幸かどうか、人が決めつけられるものではないと感じました。相模原市の事件について、中原さんのことばは「人生を勝手に奪って許せない」でした。

“生き方を選ぶ権利は誰にでもあって、それを奪う権利は誰にもない”という当たり前のことも再会して強く思いました。

中原さんは笑顔で送り出してくれて、「出会えてよかった」という幸せな思いを今回も私にくれました。次の再会を誓って私たちは別れました。

教職員のガイドライン策定 都教委、8月中旬に配布 産経新聞 2017年5月26日

東京都教育委員会は25日の定例会で、教職員のわいせつや体罰など懲戒処分対象の行為を防ぐため、ガイドラインを策定することを正式に決定した。行為の種類ごとに具体例を明示するだけでなく、処分がもたらす家族への迷惑にまで踏み込んで説明する。8月中旬をめどに全教職員約6万4000人を対象に配布し、研修などで活用して行為の根絶を目指す。

ガイドラインのタイトルは「使命を全うする!」。児童・生徒や教職員自身を守る具体的な行動として、「わいせつ行為やセクハラなどの禁止」「体罰などの禁止」「飲酒に伴う不適切な行為の防止」など全12項目を設けた。「児童・生徒に対する不要な体の接触は行わない」など項目ごとに禁止する具体的な行動を明記。実際にあった過去の行為と処分の内容を例示し注意を促す。

また、サービスの基礎知識として、最も重い懲戒免職では職を失うほか、退職金支給が制限され、教員免許も失効するなど処分のもたらす影響を改めて説明した。わいせつ行為で、報道陣が集中するなどして引っ越しを余儀なくされたケースも紹介し、本人だけでなく家族にも多大な迷惑がかかることを強調している。

新実のハッケン! 異例のベストセラー 「うつヌケ」

カンテレ 報道ランナー 2017年5月25日

今回のテーマは「うつ病」です。

最新の調査では、うつ病の患者数は、日本全国で112万人ほどに上るといことです。

そんな中、ご紹介したいのが「うつヌケ」という、うつ病をテーマにした漫画で、今ベストセラーとなっているんです。

うつ病の体験記が描かれているんですが、注目を集めているワケを取材してきました。

【新実彰平キャスター】「大阪市内の大型書店です。このあたり、話題になってる本が集まっているんですが、ありましたうつヌケ、関連書籍とまとめられて特設コーナーのようになっています」



ハッケンしたのはビジネス書や新書に交じって置かれたマンガ「うつヌケ」です。テーマは”うつ病”。この日も多くの方が手に取っていました。

【書店のお客さん】「テーマが重い割に、タッチが軽くて、手に取りやすい」

「周りにちょっと、うつの方がいらっしゃったので、どんな気持ちなのかなと思って」

【新実彰平キャスター】「(鬱のマンガが) 売れるんだというのは、どういうご感想？」

【ジュンク堂書店大阪本店 博田宏之副店長】「病気の本は、本来割とデリケートなものであって、そんなにベストセラーというものはないが、これに関しては、サラリーマンとかが多いと思うが、若い女性の方とか、主婦の方とか、まんべんなくいろんな方が読んでいらっしゃるみたいですね」



書店も猛プッシュする「うつヌケ」。その内容は・・・。

「ああ、つらい、つらい、つらいよ、なぜこんなに辛いんだ」

「わかった、お前らの辛い気持ちは分かったよ。僕が50歳をむかえる日に自殺してあげる」

生きるのがつらい。そう話す主人公、実はこの本の作者です。

「うつヌケ」の作者の田中圭一さん(55)。自殺してあげると言っていた50歳を超えて、55歳になりました。

【新実彰平キャスター】「関西テレビの新実と申します。田中先生、漫画の主人公の絵の印象と、全然違うんですね」

【うつヌケ作者 田中圭一さん】「そうですね、自画像描いた時は30代後半ぐらいで、あの頃はあんな感じだったんですけど、割とよく言われます、あれ詐欺だ」と

田中さんは、マンガを描く傍ら、京都精華大学の准教授として、漫画家の卵を育てる活動もしています。

しかし、40代の頃の田中さんは、今とは別人のようだったといいます。

「向いていない」という気持ちを抱えながら営業の仕事が続けたことから、うつ病を患ったのです。

【うつヌケ作者 田中圭一さん】「だんだん、だんだん自己否定というか。もっと頑張らないといけないのに、俺何やってるんだろうと。何でこんなにできないんだろうと自分を責めてたんです、日々毎日。そのうち、朝起きても気持ちが晴れないところから始まって、何か大きな悲しみみたいなものをずっと抱えた状態。原因不明の不安や悲しみが、毎日ずっと終わらず続くんですよ」

「うつヌケ」とは、うつから抜け出すということ。

マンガの中では、うつ病を患ってから、克服するまでの実体験が、コミカルに描かれています。



自分に合わない職場で無理をしていた田中さんは、仕事がうまくいかず「自分を嫌い」になっていました。その結果、10年間、不眠や疲労感、不安感に襲われたのです。

「うつヌケ」のために、田中さんが、どうしたかという・・・



「自分を好きになればいい。ただそれだけです」

田中さんが実践したのは、毎朝、自分が大好きと唱えることでした。

【うつヌケ作者 田中圭一さん】「起きた瞬間に自分が好きだ、自分はまだいける、自分は大丈夫という気持ちを毎日毎日、2週間くらいやっていると、日々の生活の中で笑うのが増えてきたり。面白い動画なんかをネットで見つけると、楽しいと思ったり、本当に

気分が変わってきた」

【新実彰平キャスター】「実際、ご自身がうつになるまでの、うつの認識と、なってから分かったことはありますか？」

【うつヌケ作者 田中圭一さん】「うつは、心の風邪だと、一般的に言われていますけど、そんなものではない、うつは心のガンである」



ここでハッケン。うつ病は心のガン！

経験した人から出てきたこの言葉に、はっとさせられました。

【うつヌケ作者 田中圭一さん】「風邪となると、会社は休ませてくれない。心のガンとなると、すぐに休んで、会社やめてもいいから、入院しろとなるでしょう？それだけ、うつというのは、軽くみてはいけない状態なんだよ。わかんない人にはわかんないだろう

けど、そういう認識はもってほしい」

こうした自分自身を含め、18人のうつ経験者の話をまとめたのが「うつヌケ」で、27万部の大ヒットとなっています。

この漫画に救われたという人に話を聞きました。

岡本健さんは、大学の研究室で働きづめの日々を送る中、プレッシャーが重なり、去年うつ病を発症しました。

【新実彰平キャスター】「たくさん、うつ関係の書籍はあるけど、何がうつヌケは何が違いましたか？」

【岡本健さん】「著者の方も、自分もなっているというところが、説得力がありますし。戦友というか、同士というか、こう同じような人たちがいるんだなという」



岡本さんが、一番心に響いたエピソードは、ある男性教師の体験記です。

うつ状態の男性教師に、奥さんが投げかけた一言が・・・

「つらいなら教師やめちゃえば？」

【岡本健さん】「あれを読んだ時に、そうして解決した人がいるんだと思って。僕も正直なところ、大学に、もう行きたくないのよねと、やめたいんだよねと言ったら、妻が『そんなに言うなら、行かなくてもいい、やめたらいいんじゃないの』くらいのことを言ってくれて」

【新実彰平キャスター】「岡本さんにとって、うつヌケというのは、どういう本でした？」

【岡本健さん】「うつっていう世界が、分かりやすくなったというか、抜けるための手助けをしてくれるというか、ガイドブックみたいなものですかね」

うつヌケした一人として、そしてこの本の作者として、田中さんはこんなメッセージを投げかけます。

【うつヌケ作者 田中圭一さん】「この本がこれだけ有名になることで、どうすればうつで治りますかと聞かれるんです、それが分からないという事が、この本が示していることであり、いろいろなケースがあり、いろいろな抜け方があるんだということを知っていたくことが第一。自分に合う方法を見つけていただきたい」



「ワンオペ育児」動画、なぜ話題に？

村井七緒子、仲村和代
朝日新聞 2017年5月26日

育児の風景を描いたおむつの動画広告に、批判が集まっている。何が問題なのか。

赤ちゃんの夜泣きで何度も起きる母親。食事は抱っこして片手でおにぎり。散らかった部屋でぼんやり、泣き声で我に返る――。

日用品メーカー「ユニ・チャーム」が、紙おむつ「ムーニー」の宣伝用にネットで公開した動画だ。終盤で母親は笑顔になり、最後に「その時間が、いつか宝物になる。」という言葉が現れる。約2分間の映像で、父親は後ろ姿や横顔が数秒映るだけだ。

公開は昨年12月だが、同社の別の動画が批判を受けたのを機に、5月に入って話題に。再生回数は25日現在71万回を超え、ツイッターで「大変な時期を思い出して吐きそう」「1人きりの子育てを正当化している」との意見も出た。2人の子がいる東京都の会社員女性（31）は「子育て＝母親1人ですもの、という扱いに違和感があった。問題提起はいいけど、まだまだ寛容さが足りない社会をどう変えていくかという、もう一つ先の発想が必要では」と話す。

育児に積極的にかかわる父親「イクメン」が新語・流行語大賞のトップテンに入ったのは2

6歳以下の子がいる世帯の1日の家事と家族のケアの平均時間

夫	日本	妻
1時間16分		7時間2分
3時間16分	米国	5時間37分
3時間	ドイツ	6時間11分
2時間46分	英国	6時間09分

日米は5歳以下。総務省の資料を元に作製。国により定義や調査時期が異なる

5歳以下の子がいる家庭の1日の平均育児時間

夫	乳幼児の身体世話と監督	妻
10分		1時間26分
合計 24分	乳幼児と遊ぶ	合計 54分
42分	4分 付き添いなど	合計 3時間2分
	4分 送迎移動	25分
	0分 その他の育児	6分

2011年社会生活基本調査から

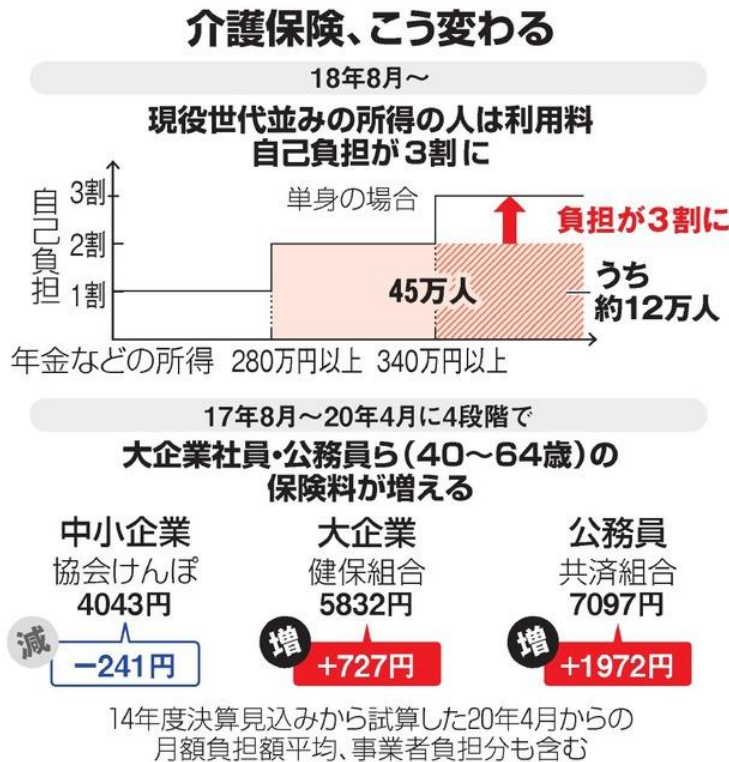


010年。ただ、総務省の社会生活基本調査（2011年）によると、5歳以下の子がいる人の家事や家族のケアの時間は、男性が1日あたり1時間16分、女性が7時間2分と大きな差がある。最近では、1人の従業員が全ての仕事をこなす「ワンオペレーション」を語源とした「ワンオペ育児」という言葉も広まる。シングル家庭だけでなく、夫の単身赴任や長時間労働、協力的でないなどの理由で、1人で家事と育児、仕事に追われ、心身の不調を訴える母親もいる。

動画の狙いについて、同社の広報担当者は「多くの母親が置かれた状況をリアルに描き、あなただけじゃないよ、と勇気づけたかった。応援したいというメッセージを込めた」と説明する。2人の子がいる高知県の自営業女性（41）は夫も育児に協力的だが「そうそう、そうだよ、と泣きそうだった。母親の孤独や大変さを上手に伝えていと思う」。同社への意見は賛否両論で、「現状を理解してくれた」という声もあり、公開は続けるという。

続く介護保険の負担増 改正法成立へ 松川希実

朝日新聞 2017年5月26日



介護保険法などの改正案が26日の参院本会議で成立する見通しとなり、現役世代並みの所得がある高齢者のサービス利用料の自己負担割合が2割から3割に上がるようになった。原則1割の利用者負担は、一部を対象に2015年夏に2割に上がったばかり。さらなる負担増を懸念する声も早くも出ている。

25日の参院厚生労働委員会。社民党の福島瑞穂氏は「所得340万円以上の人々に3割負担を強いるのは生活破壊そのもの」と訴えたが、負担増そのものを批判する議員はほとんどいなかった。一定の所得層以上に限った点に理解を示す雰囲気広がったためだ。

野党第1党の民進党は衆院での審議段階で「一般論としては、応益負担から（負担できる人により多く負担してもらう）『応能負担』への転換を進めるということは是認する」（井坂信彦氏）とした。

そんな中、法案審議で焦点となったのはさらなる負担増の可能性だった。安倍晋三首相は4月の衆院厚労委で「不断の見直しが必要だが、基本的な考え方をすぐさま変えるつもりはない」と答弁。前回の自己負担引き上げからわずか2年で再び負担増を求める改正案を審議するなか、さらなる見直しを否定せず、井坂氏は「2年後、3年後に（負担増の）拡大がありえるとおっしゃっているのか」と反発した。

ただ、高齢化の加速で介護費用が急増するなか、議論は避けられそうにはない。塩崎恭久厚労相は25日の厚労委で、高齢者が負担する介護保険料の平均が今の月約5500円から、25年に月8千円まで上がる可能性を指摘。「負担の能力に応じた範囲内で絶えざる見直しを行っていかねばいけない」と述べた。

白血病薬が ALS 進行抑制 京大、iPS 使い解明 共同通信 2017 年 5 月 25 日
神経が弱り、体が動かせなくなる筋萎縮性側索硬化症（ALS）の進行を、慢性骨髄性白血病の薬「ボスチニブ」が遅らせることを、京都大の井上治久教授（神経内科学）らのチームが人工多能性幹細胞（iPS 細胞）やマウスを使った実験で解明し、24 日付の米医学誌電子版に発表した。

「すぐに治療に使えるわけではない。適した量や副作用を調べた上、臨床試験をする必要がある」と説明している。

チームによると、ALS は、脳からの指令を神経が伝えられなくなって筋肉が痩せ、歩けなくなるなどする。患者は国内で約 9 千人。発病の詳細なメカニズムは不明で、根本的な治療法は見つかっていない。

社説：がん患者の就労 治療と両立できる環境作りを 読売新聞 2017 年 05 月 26 日

がん患者への理解と配慮を欠く不適切極まりない発言である。

「働かなくていい」。職場での受動喫煙に苦しむがん患者に関して、自民党の部会で大西英男衆院議員が放った言葉だ。

後に謝罪し、「喫煙可能な店で無理して働かなくていいとの趣旨だった」と釈明したが、撤回はしなかった。患者団体が「怒りを感じるとともに悲しい」と厳しく非難するのは、当然だろう。

がんと診断される人は、年間 100 万人に上る。3分の 1 が 20～64 歳の働く世代だ。

医療の進歩で、診断後 5 年の生存率は 6 割超にまで向上した。働く意欲と能力のある患者が増えているものの、がん患者の就労を巡る状況はなお厳しい。

診断を受けた時点で会社に勤めていた人の 3 人に 1 人が、依願退職や解雇で離職している。「職場に迷惑がかかる」「両立に自信がない」といった理由が多い。退職強要や降格を恐れ、職場に伝えられずにいる患者もいる。

内閣府の世論調査では、がんの治療と仕事の両立は困難だ、と考える人が 6 割超に上る。離職後の再就職もままならず、職場を選ぶ余地は限られるのが実情だ。

働く世代の患者にとって、仕事は生きがいや治療の励みになる。高額な治療費負担が続くため、働かざるを得ない事情もある。

がんになっても、適切な支援があれば働き続けることができる。政府は、正しい知識の普及・啓発に努め、患者が安心して働ける環境作りを急ぐべきだ。

2012 年度からの第 2 期がん対策推進基本計画は、患者の就労支援を重点施策に掲げる。

昨年 12 月施行の改正がん対策基本法は、患者の雇用継続への配慮を企業の努力義務とした。政府の働き方改革実行計画でも「仕事と治療の両立」が柱の一つだ。

政府は、ハローワークへの専門相談員の配置や、医療機関と連携した就労支援を進めてきた。こうした取り組みを一層広げたい。

企業には、治療を受けながら働ける柔軟な勤務形態や休暇の導入、主治医らを交えたサポート体制作りなどが求められる。

職場の受動喫煙防止も重要である。健康被害を招くたばこの煙にさらされて働くことは、がん患者にとって大きな不安だ。

勤務先の防止策が不十分でも、簡単に転職はできない。仕事の都合で喫煙可の飲食店に行かざるを得ない場合もある。患者の立場を考慮した政策論議が望まれる。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町 5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行

